

「ふくしま『学宿』」報告会から繋げる防災教育

保健体育科 増 田 かやの

1 はじめに

本校は福島県観光交流局観光交流課、福島県観光物産交流協会が主宰し、2017年11月10日から12日の2泊3日で実施された福島県教育旅行モニターツアー（以下、モニターツアー）に、埼玉県立浦和第一女子高等学校と合同で参加した。このモニターツアーは「今、福島でしか学べないことがある！ふくしま『学宿』」と名付けられており、福島をフィールドとした「主体的対話的で深い学び」の実現を目指したものである。本校からは1年生9名、2年生13名、引率教諭2名が参加した。

筆者はこのモニターツアーに引率の一人として参加した。ここ数年間は、校務分掌の防災担当として防災教育を推進していく立場にありながら、その方法に苦慮していた。いずれ起こるといわれている首都直下型の大規模災害に備えて、自分事として防災に関心を持ち、主体的に行動することができる生徒の育成を目指して、保健教育の中で何ができるのか、試行の日々であった。

そこで、今回のモニターツアー参加を機に防災教育に繋げることができないかと考えた。まずは、今年度の授業の中で、モニターツアーに参加した生徒によるピアエデュケーションの実施を試みた。モニターツアー中の研修内容は「見て聞いて考える」要素が大変充実しているものであることから、生徒の純粋な感性をそのままピアエデュケーションとして伝えたいと考えた。筆者は、養護教諭として本校に赴任しているが、保健科教諭として1年生の保健科授業も担当している。養護教諭として保健室からの視点も生かして、授業づくりを心掛けている。

災害は避けられないが、減災は可能である。被災する前に準備しておいてほしい内容について、生徒とともに学習する中で、防災備蓄品などの物理的な準備以外に大切なことについて気づき、次の学習に繋げる学習を試みたいと考えた¹⁾。今回は、その導入過程としての報告である。

2 授業の実施内容

2.1 「ふくしま『学習』」における研修内容

「ふくしま『学習』」における研修概要は次のとおりである（表2-1-1）。モニターツアー中の研修内容は「見て聞いて考える」要素が大変充実しているものであった。車窓から帰還困難地域の現状を見て、福島に生きる人たちからの声を聴いて、さらに振り返りのディスカッションを通じて思考を深めることを繰り返した。

表 2-1-1 「ふくしま『学習』」研修概要

日程	見学場所講師と講和の内容
11月10日 (金)	<p>①長沢 涼子氏 (福島県男女共生センター) 東北最大級の避難所「ビッグパレットふくしま」に派遣され、長期化する避難生活の中で女性の生活の質の向上と安全確保の観点から避難所の運営についてお話いただいた。</p>
11月11日 (土)	<p>福島県環境創造センター「コミュタン福島」見学</p> <p>②秋元 洋子氏 (川内工業(有) 代表取締役 川内村婦人会会長) 震災後に「いつでも人が戻ってこられるように」との思いから、「ひまわり」を創設。村内のコミュニティを支える役割を担い、震災当時の状況や帰村後の課題についてお話を伺った。</p> <p>③東京電力女性社員 帰還困難状況にある地域住民に対する補償問題や廃炉処理に携わる立場からお話を伺った。</p> <p>国道6号線の通過 一部が帰還困難区域を含む避難指示区域を通る道路を通過する。原発事故が起こった当時のままの店舗や雑草が生い茂ってしまった田んぼなどを車窓から確認。日没後は、明かりが消えた街に、ところどころに防犯のための警備員が立っている様子が確認できる。被ばく量も確認しながらの通過であった。</p> <p>④越智 小枝氏 (相馬中央病院非常勤講師) 2013年11月より相馬中央病院に勤務するに至った、災害公衆衛生学の分野のお話や福島の放射線以外の健康問題や食の問題に関する啓発活動のお話を伺う。また、医師を目指したご自身の経験を踏まえての「チャンスの前髪をつかむ」キャリア教育へも言及していただき、生徒も大いなる刺激を受けた。</p>
11月12日 (日)	<p>⑤菅野 クニ氏 (ニコニコ菅野農園) 2012年、国のプロジェクトに採択された農場を立ち上げる。飯館村の住民の立場から、帰村の現状や地域のコミュニティ、主力産業である農業の再生について飯館村内をバスで移動しながらお話を伺う。 「いいだての道の駅 までい館」にて</p> <p>2017年3月31日に避難指示が一部解除された飯館村に復興のシンブルとして整備された道の駅。ここで販売されている農作物や花卉はすべて館内にある放射能測定器によって検査を受けている。</p> <p>避難所シミュレーション教材「さすけなぶる」を使用したワークショップ</p> <p>⑥天野 和彦氏 (福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授) 上記教材の開発者である。大規模避難所運営の教訓を生かして、実際に起こった事例を紹介しながら、災害時における模擬避難所運営スタッフとしての意思決定体験を、初動期、混乱期、自治形成期の時系列に沿って体験するワークショップを行った。避難所での現実をリアルに伝えていただいた。</p>

2.2 授業の目的

生徒同士のピアエデュケーションを通じて、福島現状について理解と関心を持ち、「自分事」として捉える機会を作りたいと考えた。さらに、研修中に生徒が実施していたブレインストーミングの言葉や講師陣の言葉から、防災に必要な視点を重点化して、発表会以降の授業に繋げたいと考えた。一つは、「命を守る行動」を主体的に行うこと。もう一つは日常的なメンタルヘルスの維持向上の重要性である。昨今、子どもをめぐる健康課題としてメンタルヘルスの向上が挙げられているが、防災教育の一環としてもメンタルヘルスの保持増進は重要であると考えた²⁾³⁾。このモニターツアーを企画した、フィールドパートナーの前川直哉氏（一般社団法人 ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長）にも承諾を得て、本授業を実施することに至った。本授業の目的を次の3項に定めた。

- 1 東日本大震災の被災地である福島で起こっていることを理解し、複合災害とは何かを考えることができる。
- 2 都市直下型地震や台風等様々な災害に対して、防災意識を高め「命を守る行動」が自主的に実行できる。
- 3 災害時におけるメンタルヘルスを維持するためには、日常的に心の健康を保つことが大切であることを理解する。

2.3 生徒による福島研修報告会

記憶の新しいうちに発表をしたい（させたい）ということで、生徒自身が見て、聞いて、考えたことを率直にクラスの生徒へ伝えるべく、発表時に心掛けることとして、被災者の気持ち、研修の感想、みんなに伝えたいことを事前に発表を担当する生徒に伝えた。

報告会は、筆者が担当している保健科の授業時間を使って、次の日程で実施した。

- 1年蘭組 11月17日（金）7限（参加生徒 4名）
- 1年菊組 11月21日（火）1限（参加生徒 2名）
- 1年梅組 11月21日（火）5限（参加生徒 3名）

発表会の内容として、生徒が作成したプレゼンテーション用ファイルの一部を次に紹介する。ファイルの作成は基本的に生徒の自由意志とし、写真などはモニターツアー中に自分たちで撮影したものを使用した。また、講師が使用した資料については、筆者が直接講師に使用許可を得ている。

Triumph
「トリumph」のプラジャー
申込受け付けます!

個人のご一歩に
きかけたいと願う

その人その人によって求めている
支援は違う!

これは個人の課題だ。
私自身の課題だ。

その人個人の問題としてではなく
影に隠れたジェンダー・人権問題として
とらえる視点・意識が大切



実際に私たちが行ったところの放射線量

郡山駅

いいたての道の駅

東京都全域の測定結果一覧
2017年11月16日 12時00分

東京都	0.036
東区	0.036
中央区	0.032
北区	0.032
東区	0.032
南区	0.029

<http://radioactivity.nsr.go.jp/ja/index.html>

福島現状

放射線物質の影響で
地表5cmが削られた

みんこの自衛力? 明い おおみかを

大量のフレコンバック

1袋1t

福島現状
帰宅困難地域

ガラスが割れたままの建物

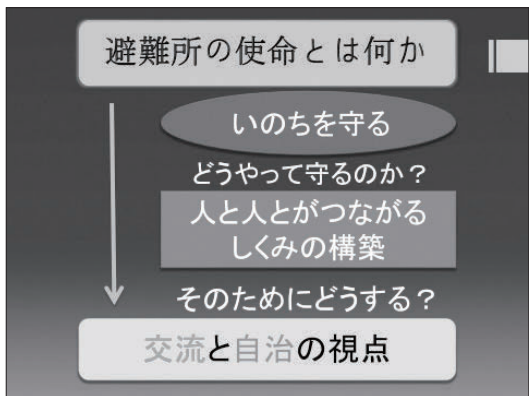
家の前にバリケードがある

飯館村メガソーラー(大規模太陽光発電所)

飯館村全体で発電される電力
36MW(メガワット)7000世帯分

飯館村の人口
6509人(平成23年3月11日時点)
婦村率8.1%→約527人

再生可能エネルギーで十分に賄える



印象的だったこと

- 想像力: 見方を変える(人権など)
- 司令塔: 情報から方向性を考える
- 『排除』、『無視』、『我慢の強制』
→やってはならないこと
- 避難所と専門機関の協力(女性専用スペース、
おだがいさまFMなど)

2.4 アンケートの結果分析

福島に関する生徒の予備知識や意識の実態調査並びに授業を実施したことによる変化を測るためにアンケートを授業前、授業直後、授業3か月後に実施した。アンケート結果は次の通りであった（表 2-4-1, 2）。

まず、「福島」と聞いてイメージするものは何かを自由記述で回答するよう求めたところ、大半の生徒は、モモ、米などの農作物やあかべこ、会津塗などの名産品、会津藩、白虎隊などの史跡、歴史上の人物を挙げていた。その中で、約半数の生徒が、地震、浜通り、原子力発電所、被災地など東日本大震災に関連する言葉を挙げていた。

表 2-4-1 授業アンケートとその結果①

問 2 次の各項目についてあてはまるところに○をつけてください。（授業前授業後）

番号	項目	選択肢	回答			
			授業前	(%) n=110	授業後	(%) n=103
1	食品の産地を確認していますか？ (授業後：食品の産地を確認しようと思いましたか？)	している	54	49.1	50	48.5
		時々している	41	37.3	39	37.9
		していない	14	12.7	14	13.6
		未回答	1	0.9	0	0.0
2	福島県産のものを安心して食べることができますか？	そう思う	36	32.7	38	36.9
		ややそう思う	43	39.1	50	48.5
		ややそう思わない	25	22.7	10	9.7
		全くそう思わない	5	4.5	3	2.9
		未回答	1	0.9	2	1.9
3	福島についてニュースや新聞で報道されていることに関心がありますか？	よくある	27	24.5	32	31.1
		ややある	54	49.1	54	52.4
		あまりない	26	23.6	16	15.5
		全くない	2	1.8	1	1.0
		未回答	1	0.9	0	0.0
4	福島原発で発電した電気はどこで使われていた？	福島県内	2	2.2	3	3.2
		東北地方	7	7.5	9	9.7
		関東地方	79	84.9	75	80.6
		北陸地方	1	1.1	2	2.2
		その他()	0	0.0	2	2.2
5	福島県産の米は放射能の影響を受けていないか心配だ	そう思う	17	15.5	10	9.7
		ややそう思う	43	39.1	37	35.9
		ややそう思わない	30	27.3	31	30.1
		全くそう思わない	18	16.4	25	24.3
		未回答	2	1.8	0	0.0

6	モニタリング検査を知っていますか？	知っている	27	24.5	49	47.6
		知らない	82	74.5	54	52.4
		未回答	1	0.9	0	0.0
7	帰還困難区域では人は住むことができない	そう思う	29	26.4	44	42.7
		ややそう思う	55	50.0	44	42.7
		ややそう思わない	22	20.0	11	10.7
		全くそう思わない	3	2.7	3	2.9
		未回答	1	0.9	1	1.0
8	原子力発電の使用済み核燃料の処理方法は？	処理方法は決まっている	35	31.8	31	30.1
		処理方法は決まっていない	73	66.4	71	68.9
		未回答	2	1.8	1	1.0
9	日本にとって、原子力発電は必要だ	そう思う	19	17.3	15	14.6
		ややそう思う	55	50.0	43	41.7
		ややそう思わない	22	20.0	29	28.2
		全くそう思わない	12	10.9	15	14.6
		未回答	2	1.8	1	1.0
10	廃炉にはあとどのくらい時間がかかる？	10年	1	0.9	1	1.0
		50年	24	21.8	27	26.2
		100年	16	14.5	12	11.7
		無限	28	25.5	22	21.4
		わからない	41	37.3	40	38.8
		未回答	0	0.0	1	1.0
11	日本に原発が不可欠だとしたら、あなたが住んでいる自治体に建てても良いですか？	そう思う	8	7.3	9	8.7
		ややそう思う	14	12.7	14	13.6
		ややそう思わない	36	32.7	35	34.0
		全くそう思わない	49	44.5	43	41.7
		未回答	3	2.7	2	1.9

報告会の前後で数値が変化した項目は、「福島県産のものを安心して食べることができますか？」について、「そう思う」「ややそう思う」と回答した生徒が、71.8%から85.4%に上昇した。「福島についてニュースや新聞で報道されていることに関心がありますか？」について、「そう思う」「ややそう思う」と回答した生徒が、73.6%から83.5%に上昇した。「福島県産の米は放射能の影響を受けていないか心配だ」について、「そう思う」「ややそう思う」と回答した生徒が、54.5%から45.6%に減少した。

さらに、授業後3か月後に、報告会やその後の授業に関連して、アンケートを行った。

まず、東日本大震災や福島原発の問題に関連することについて、授業後に自主的に調べたことはあるかについては、「ある」と回答した生徒が、35名(29.4%)、「ない」と回答した生徒が82名(68.9%)であった。「ある」と回答した生徒が具体的にどのようなことを調べたかについては以下の通りであった。

- 福島県での果物などの放射線基準値や検査方法など。
- 原発による被爆の恐ろしさについて調べた。チェリノブイリ事故を例に、障害のある子供（奇形児）がたくさん生まれてくることなどを知った。
- 現在の福島の様子、テレビの映像をみあさって東北の現状をしらべていた。
- 気仙沼へ行き、今の復興状況を見ました。
- 震災当時の避難所の詳しい様子について、改善に向けた取り組みとして何が行われていたか（紙で作った仕切りの話など、コミュニケーション英語とも関係があったため）。
- 福島に行った。福島の波の高さ、数少ない健物から津波のおそろしさがわかった。立入禁止区間と立入できる区間は看板1つでくぎられていて、本当に立入っても安全なのか疑問に思った。
- 東日本大震災による被害や現状を調べて、今私が住んでいる東京でもし地震が起きたらどうなるか、どうすべきかを少し考えた。
- 現状について調べてみたら今でも困っている人がいるということに驚いた。放射性が多かった地域はまだ立ち入りができなくて仮設住宅に住んでいる人がまだ多く入りことも分かった。
- ふくしまモニターモニターツアーに参加した立場として、報告会を行った後友達に、「飯館村などの帰還率はわかったけれど、東北全体で避難して帰ってきた割合はどのくらいなの？」と聞かれたため、東北全体の帰還率について調べてみた。
- 東日本大震災後に自分の自治体の防災意識がどのように変わったのかを調べた。また、モニターモニターツアーに参加したときの資料を読み返した。これから、防ぐことができる震災関連死について調べていきたい。
- 風評被害か今もまだ続いているのかについて。
- 東日本大震災で被災した地域の新しいまちづくり計画。津波で流された町の現状について。
- 福島産の食べ物の安全性について調べた。きちんと検査してから売り出されていることを知ることができたため、これからは復興への応援もかねて、積極的に買うようにしたい。
- 自分の家ではどこに避難すればよいのかを調べた。これからは、福島での農作物への取り組みなどについて調べたい。
- テレビで福島原発を今後どのように廃炉にするのかを説明していた。前例がないことなので、責任の所在すら不確定なところがあり、問題が山積みであることがわかった。
- 東日本大震災によって被災された方々のお話をテレビで聞き、今どのような気持ちでいるのかを知った。現状の写真。スーパーで福島産のものが売られているかどうか。
- 震災被害に遭った地域への募金について
- 新聞などで、震災当日にその母親のお腹の中にいた子供たちが震災とどう向き合っているのかの記事を読んだ。
- 東日本大震災が与えた影響として、がれきの様子や、農産物のダメージについて。また、福島原発の放射能やそれらの処理をどのように行っているのか。
- 食べ物が実際、どれだけ危険なのか
- 韓国の原発付近産地の食品輸入について。日本が訴えた裁判のこと。
- スーパーに行って、どのくらい福島県産の食品があるのかを調べてみたり、世界の原発を調べたりしてみた。
- 犠牲者が多いところと少ないところの訓練や地震後の対応のちがひ。少ないところは、小さい子供でさえ、とにかく走ってにげることを日ごろから体得していて、危機意識が強かった。
- (避難所について) どうして鍵のかかる個室は危険だったのか。なんで夜も電気がつけっぱなしだったのか。

- 福島原発の問題から長い年月がたとうとしているが、私たちが思っていた以上に傷は深く、まだ復興のスタートラインであることを知った。(インタビュー記事を調べた。)
- インターネットの記事を見たり、福島県のHPを見たりしている。また、原発についての本を買ったり、借りたりして読んでいる。今後は、首都直下型地震についての記事を探してみたい。
- 原発の現状について。放射性廃棄物の処理について。
- 福島の原発が現在どのような状態なのか調べた。凍土壁などが出来たものの、廃炉までは何十年もかかり、心の復興も含めて現地の復興はまだ終わっておらず、続いているのだと知った。

表 2-4-2 授業アンケート (3 か月後) とその結果②

問 2 次の各項目についてあてはまるところに○をつけてください。

番号	項目	選択肢	回答数 (%) n=119	
			回答数	%
1	食品の産地を確認していますか?	している	59	49.6
		時々している	50	42.0
		していない	8	6.7
		未回答	2	1.7
2	福島県産のものを安心して食べることができますか?	そう思う	51	42.9
		ややそう思う	47	39.5
		ややそう思わない	17	14.3
		全くそう思わない	2	1.7
		未回答	2	1.7
3	福島についてニュースや新聞で報道されていることに関心が高まりましたか?	よくある	45	37.8
		ややある	63	52.9
		あまりない	8	6.7
		全くない	1	0.8
		未回答	2	1.7
4	福島県産の米は放射能の影響を受けていないか心配ですか?	そう思う	11	9.2
		ややそう思う	31	26.1
		ややそう思わない	44	37.0
		全くそう思わない	31	26.1
		未回答	2	1.7
5	モニタリング検査のことを理解できましたか?	理解できた	102	85.7
		理解できない	15	12.6
		未回答	2	1.7
6	日本に原発が不可欠だとしたら、あなたが住んでいる自治体に建てても良いですか?	そう思う	6	5.0
		ややそう思う	16	13.4
		ややそう思わない	48	40.3
		全くそう思わない	47	39.5
		未回答	2	1.7

2.5 「災害と健康」の授業の実施

学習指導要領に基づいて、精神の健康、応急手当の授業を行う中で、教科書にある「防災防犯をめざした社会づくり」の内容を振り返る形で授業を実施した。近い将来発生するといわれている大規模地震をはじめとする災害に備え、命を守るために今何が必要かを考えるところに繋ることをねらって、授業を展開してみた。

授業の内容は次の通りであった。

- ① 「ふくしまモニターツアー」の内容の確認。
- ② アンケート内容の解説。
- ③ もし、東日本大震災のような震災が起こったら、何に困るだろうか。また、どのような準備が必要か。

また、「精神の健康」では、次の内容にも触れた。

- ① 震災による避難生活など非日常的な生活を送る場合、心の健康には何が大切か。

さらに、3学期の定期テストとして、次の2問を予告問題として設定した。

問1 「命を守る行動」とは何か。具体的に説明せよ。

問2 「減災」を目的とした日常的な行動や心掛けとしてどのようなことが挙げられるか、あなたの考えを述べよ。

今回は、通常授業の中で、上記の内容を含めることにとどまった。定期テストの結果としては、「命を守る行動」についてはほとんどの生徒は理解をしており、「減災」を目的とした日常的な行動や心掛けとして、「防災グッズを新調（更新）した」や「家族と防災について話し合った」「自治体の防災システムについて確認しておく」などが挙げられた。その中でも「メンタルの健康に気をつける」「コミュニケーションを大切にする」などメンタルヘルスに関する記述も見られた。

3 考察

生徒によるモニターツアー報告会によって、「福島県産のものを安心して食べることができる」や「福島についてニュースや新聞で報道されていることに関心が高まった」、「モニタリング検査のことを理解できた」については、一定の効果があつたことが確認できた。一方、原子力発電に関わる内容については、言及することがかなわなかった。こちらの勉強不足もあるが、専門的な知識を要する内容であることから、他教科とのクロスカリキュラムを組んで、体系的に学ぶ環境づくりが必要であると考えた。

また、3か月後のアンケートによると、震災後の現状や原発事故のこと、今後の影響など自分が関心を持った分野について自主的に調べている様子をうかがうことができた。生徒の報告会を受けて、教科書にある「防災防犯をめざした社会づくり」という内容にも触れつつ、近い将来発生するといわれている大規模地震をはじめとする災害に備え、命を守るために今何が必要かを考えるところに繋げることもわずかである

が実施することができた。何より、ピアエデュケーションによる授業によって、生徒の関心を引き出す効果はあり、その意義は大きかったと考える。

災害によって非日常的な環境にさらされ、ストレスか過剰にかかる状況においていかにメンタルヘルスを保持するかという課題に対して、コミュニティづくりが重要であることはわかっている⁴⁾。

日常的な人間関係を意識的に構築させる働きかけを学校教育の現場では必要であり、発災前のアセスメントとして重要になるであろう。また、備蓄品などを準備するのと同じように、事前に災害時の心理的反応を学ぶことも重要である⁵⁾。これには、個々のメンタルヘルスのコンディション作りも重要あり、レジリエンスを高めるための施策が有効であると考え⁶⁾。

今後の課題は、自分事としてとらえ、いざ自分たちが被災したときに学習したことを実行できることをめざして、より具体的な教材づくりを進めていくことである。また、継続的に福島をはじめとする被災地の実態を伝え続けていくことと、予防的な心理教育を実践していくために研鑽することが筆者の責務である。

4 謝辞

今回のモニターツアー報告会並びにその関連授業を実施するにあたり、一般社団法人ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長の前川直哉氏、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの天野和彦氏、福島県観光交流局観光交流課の佐藤良作氏、公益財団法人福島県観光物産交流協会の支倉文江氏、小野田綸氏そしてモニターツアーで出会い、多くの学びを与えてくださった「ヒューマン」の皆様がこの場を借りて御礼を述べさせていただきたい。

参考文献

- 1) 福和信夫著「次の震災について本当のことを話してみよう」時事通信社 2017
 - 2) 清水将之編著「災害と子どものこころ」集英社新書 2012
 - 3) 木村玲欧著「災害防災の心理学」北樹出版 2016
 - 4) 諏訪清二著「防災教育の不思議な力」岩波書店 2015
 - 5) 窪田由紀、松本真理子、森田美弥子 名古屋大学こころの減災研究会編「災害に備える心理教育」ミネルヴァ書房 2016
 - 6) シェリルサンドバーグ、アダムグラント著 櫻井祐子訳「OPTION B」日本経済新聞出版社 2017
- (上記の他に教材づくりの際に参考とした著書)
- ・フレデリック J. スタッダード Jr、クレイグ L. カッツ、ジョセフ P. メリーノ、世親医学振興会編 小谷英文監訳「不測の衝撃」金剛出版 2014
 - ・立田慶裕編「教師のための防災教育ハンドブック」学友社 2014